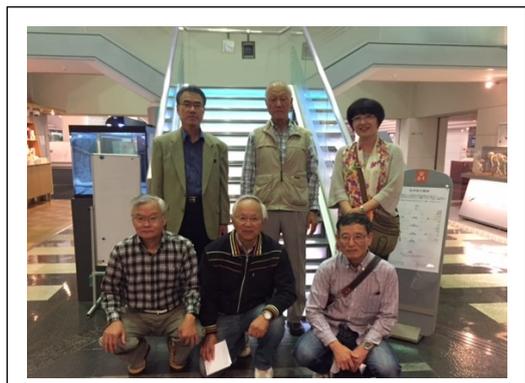


JT 生命誌研究館見学記

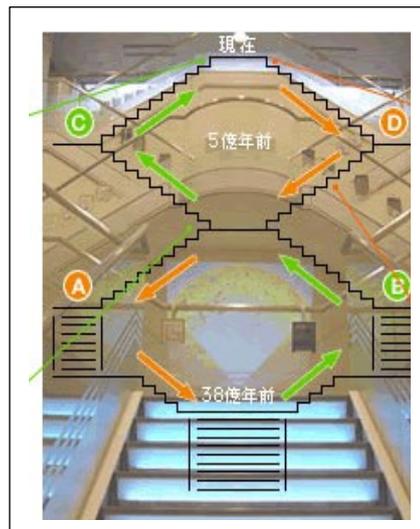
神牧智子(JRMN 会員)

〈写真撮影：神牧智子、奥村勝〉

秋の一日、日本リスクマネージャネットワーク (JRMN) の 10 月の会員交流集会の企画として、暖かな雨模様の日由高槻市にある J T 生命誌研究館を見学しました。同館職員のMさんの案内で 38 億年前にタイムスリップし、生命の歴史のあゆみを文字通り一段ずつ階段をのぼりながら概観しました。



〈生命誌の階段の前で記念写真〉



生命誌の階段(研究館 HP より)

生命誌は聞きなれない言葉ですが、38 億年に生まれたであろう祖先細胞から現在のわたしたちが生きる地球上の多種多様な生物につながる生命の歴史をいうのだそうです。

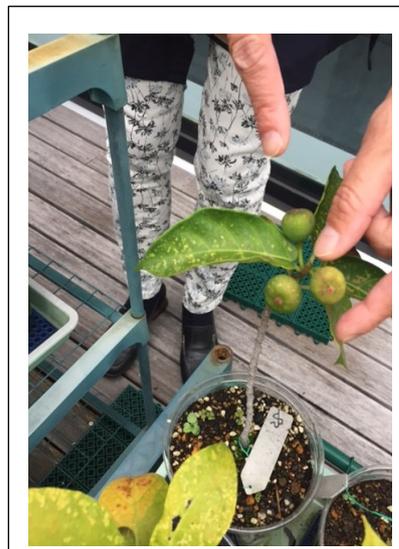
館内には生命誌を説明する芸術作品ともいえるような展示物が多数あり、特にわたしたちが見とれたものは、受精卵から個体ができ上がっていく発生の過程を7つの階層で表現をした「生命誌マンダラ」です。



「生命誌マンダラ」

これは1センチ四方に8000個もの点で表現されている緻密な織物となっており、単純と思われる生物から様々な器官が発生し、それがどの種にも共通している構造であることを階層的に表現した非常に美しいものでした。

同館での研究は地球上に非常に多数の種が存在する昆虫を題材にするものもあります。



屋上の研究園では、イチジクとコバチの共生研究用にたくさんの品種のイチジクが実っていました。研究者はコバチの幼虫をイチジク

の実に置き、実の中にはいるやいなや袋をかぶせ、観察を続けていくのだそうです。

また、チョウの幼虫は種によって決まった植物の葉しか食べないことが知られていますが、親はその植物をどのように見分けているのか。



メスのチョウの前肢にある味覚受容体の研究のために植えられた柑橘類やウツギ等蝶の好む植物にアゲハの幼虫やさなぎを見つけ、虫捕り少年気分を味わいました。

いずれにせよ、生命誌研究には、根気のいる長い観察と深い洞察が必要なのだとあらためて思いました。

一階では、ゲノム研究の特別展も開催されており、学生時代に学んだことをおぼろげに思い出しながら拝見しました。

地球上の多様な生物は細胞でできており、細胞にはゲノム（DNA）が入っています。

38億年前に海で生まれた祖先細胞の小さなゲノムが、親から子そして生きもの間でやりとりされて塩基配列が変わり、さまざまな種が発生してきたことを再び回想するコーナーとなっていました。ゲノム研究は近年猛烈なスピードで進んでいます。このようないのちのやりとりを人間が科学で解明していく手順には、リスクとベネフィットが介在しており、科学的事実を観る力、将来への影響を量る力が問われます。ゲノムを知り、解決できる課題もあれば、ゲノムを操作し、過去にはなかった課題を抱えることもまたありえると感じました。

見学後、高槻駅近くで懇親会を開催し、会員相互の交流をはかりました。イチジクのメニューがなくて残念でした。これから食卓にイチジクがのぼれば、コバチを思い出してしまうことでしょうか。（食用に栽培されているものはコバチが入らないよう防除をしているとの説明でしたので、安心してお召し上がりください。）

【 JT 生命誌研究館 URL <http://www.brh.co.jp/> JR 高槻駅から徒歩約 10 分 】